



Research Office Newsletter

Conversation With Professor Yufu Iguchi

今回は、APU卒業生であるリサーチ・オフィス新井が、井口由布教授の研究についてお話を伺いました！



アジア太平洋学部 井口由布教授

研究分野：地域研究、ジェンダー、思想史

著書：マレーシアにおける国民的「主体」形成
—地域研究批判序説—

新井：私は学生時代に受講した先生の授業がとても印象に残っています！先生の授業を受けて「当たり前を疑う」ことの大切さに気づきました。そんな先生がどんな研究をなさっているのかとても興味があるのですが、最近の先生の研究について教えていただけますか？

授業のもっともコアなところが印象に残っていたのは教師冥利につきます。ご指摘のとおり、授業では、文化的な現象をジェンダー、家族、人種やナショナリズムにかんする現代の神話などの観点から読み解いていきます。わたし自身はこれまで多民族社会であるマレーシアの国民的アイデンティティについて研究してきました。2012年頃から、国民的なアイデンティティにおけるジェンダー的な側面に着目するようになってきました。マレーシアにおいて女性がどのように表象されているのかを「女性器切除FGM」に焦点を当てつつ探求する研究です。2012年に科研費の挑戦的萌芽を、2015年には基盤Cを獲得しました。

ほとんど知られていませんが、マレーシアでは「女性器切除FGM」と言われるような実践がムスリムであるマレー系の女性たちのあいだでとてもポピュラーです。マレーシアでは、有名なアフリカの「FGM」のように女性器の一部を切除するという事はほとんどなく、乳児のときに施術してしまうのが一般的で、大人になったときに傷跡などが残っているということはありません。なぜこのような実践を行うのか、どのような意味があるのか、よく言われるように女性のセクシュアリティのコントロールなのか、などわからないことだらけでした。マレーシアの「FGM」についての学術的な研究はとても少なく、研究を開始した当初は2本の医学的な論文しかありませんでした。

そのうちの一本を執筆していたマレーシアの公衆衛生学専門のラシド教授と2015年から国際共同研究をしています。2016年には伝統的な施術者や施術を受けた農村女性たちにインタビューをしました。その後、科研費（国際共同研究加速基金）に採択され、2018年の1年間ラシド教授のいるRCSI & UCD (royal college of surgeons in ireland and university college dublin) マレーシアキャンパスに滞在し、「FGM」の医療化について共同研究をしました。最近の「FGM」は診療所において医師が行なっていることが多くなっているからです。

研究を進めていくなかで「FGM」が東南アジアのムスリム共同体で広く行われていることがわかってきました。そこで今年度から東南アジア全体での「FGM」をアフリカにおける実践と比較して考察する国際共同研究を科研費（基盤B）で開始しました。



ラシド教授(中央)、共同研究者アフィカさん(左)との一枚

新井：アフリカの女子割礼については聞いたことがありましたが、東南アジアでも行われているとは、びっくりです。

東南アジアでは12世紀ぐらいからのイスラムの伝播にともなって「女子割礼/FGM」も伝わってきたようですね。アフリカではイスラムより古い実践でファラオ以前の時代からあって、アフリカのユダヤ教徒やキリスト教徒の一部も行なっています。びっくりするかもしれませんが、実は日本でも「FGM」はあるのです。医学的な意義のない女性器の切除というWHOの基準に照らせば、女性器の美容整形手術は「FGM」です。先進国の女性たちは自分の意思でやっているからよいと主張する人もいますが、その女性たちの意思が男性中心の社会で作られたものであるという可能性は否定できません。なぜ先進国の美容整形手術は問題にならず、第三世界の性器手術だけが問題になるのかというところには、ジェンダーと（ポスト）植民地主義が複雑にからまっているといえますね。

また、出産のときに日本では当然のように行われる会陰切開も、「FGM」との関係で考えることもできるかもしれません。会陰切開は医療行為として認められています。WHOは推奨していません。そのような会陰切開が多用される背景の一つには、会陰切開が母になるための試練の一つであるという「神話」になっていることもあるようです。そうするとアフリカにおけるイニシエーションとしての「FGM」と共通しているところがあるかもしれません。

新井：日本でも・・・！それは知りませんでした。確かに、先進国の女性たちの意思決定や「神話」の背景にも、たくさんの要素が絡み合っているように思えます。ところで、この問題は女性ばかりが取り上げられている印象があるのですが、なぜなのでしょう？

その通りですね。「女性器切除」問題は、「女性器」が取り上げられているということでセンセーショナルでモラル・パニックになってしまうことが多いです。アフリカの女性たちにとって、確かに「FGM」は大変な問題かもしれません。ですが、彼女たちにとって貧困、搾取、差別なども大変な問題なのに、「FGM」のように取り上げられません。

「男性器切除」である男性の割礼についてはあまり問題になっていません。実はここにもジェンダーと植民地主義が絡みあう問題があります。男性の割礼には医学的な意義があると言われますが、本当に全ての男性を割礼すべきでしょうか。ある研究者の指摘では、WHOが男子割礼を問題にしないのは、イスラム教だけでなくユダヤ教やキリスト教でも男子割礼が実践されているからだということです。

マレーシアやインドネシアでの実践で考えれば、男性の割礼の方が女性よりも切る部分も多く、治癒には時間がかかります。村落部では消毒も満足にしないカミソリで何人も少年を割礼するため、HIVなどの感染症になる事例が多数あるといえます。



村の女性たちとのフォーカス・グループ・ディスカッションの様子

新井：ここにもジェンダーや植民地主義が絡んでいるのです。最後に、先生がこの研究を通して、伝えたいことを教えてくださいませんか？

「FGM」という問題は、アフリカ女性の人権かそれとも伝統文化の尊重かという対立軸でこれまで議論されてきました。私はマレーシアという地域をこの問題系に加えようとするよりはむしろ、「FGM」問題を通してジェンダー化された身体やセクシュアリティについて、根源的に考察したいと思っています。

第一に「FGM」問題における植民地主義的な性格を問うことです。アフリカにおける性器手術は非人道的で家父長制的だと問題になるのに、先進国の美容整形が問題にならないのはなぜでしょうか。先進国の女性たちが主体的に判断しているからよいと言う人がいますが、彼女たちの判断は男性による美の基準とまったく独立しているのでしょうか。「FGM」問題は、どこか遠くの国の話ではなくわたしたちの問題なのです。第二は、「FGM」問題をとおして、女性の身体とセクシュアリティがどれだけいつも問題化され、男性のそれが問題化されないかを問うことです。女性の身体はいつも観察されるのに対して、男性の身体は観察されません。それは男性が観察する主体の位置にあるからです。

このように、マレーシアの「FGM」問題の研究をとおして、わたしは先進国と途上国とのあいだ、男性と女性とのあいだの非対称の関係があること、それにもかかわらずその関係が見えなくなっていることを伝えたいと思っています。



ラシド教授との学会発表の様子

Grants-In-Aid For Scientific Research (Kakenhi)

2019年度科学研究費助成事業（科研費）新規採択者の皆様を発表いたします。皆様、おめでとうございます。

研究種目	研究者名	研究課題名
基盤研究(B) (一般)	井口 由布 教授	ポスト植民地における女性の身体—東南アジアとアフリカの「女性器切除」—
基盤研究(C) (一般)	轟 博志 教授	朝鮮時代の国土地理認識における「水経」の基礎的研究
	佐藤 洋一郎 教授	民主化促進政策と地政学
	鈴木 泰 教授	リバース・ムラバハを巡るイスラム金融ガバナンス制度比較とシャリア法遵守コスト分析
	鈴木 勘一郎 教授	ESG投資における社会的評価モデルの研究
	藤本 武士 教授	ベンチャー・中小企業におけるグローバル・ニッチトップのイノベーションに関する研究
	木村 力央 教授	途上国における宗教を基盤とする社会的企業：ハイブリッド組織の理論構築を目指して
国際共同研究 加速基金	吉川 卓郎 教授	ヨルダン政治と部族社会：南部の政治・社会・経済に関する現地調査を中心に
若手研究(B)	篠原 欣貴 准教授	ソーシャル・アントレプレナーの戦略に関する研究
	Le Hoang Anh Thu 助教	Buddhist charitable practice, Old-age experience and personhood of Vietnamese elderly
研究活動 スタート支援	範 鵬達 助教	子会社上場に関する新しい視点からの実証研究：企業文化を中心に

科学研究費助成事業（科研費）とは？

科学研究費助成事業（科研費）は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」を格段に発展させることを目的とする国の競争的研究資金です。

リサーチ・オフィスでは？

リサーチ・オフィスでは、科研費獲得のための申請支援を行っております。科研費の申請を促すこと、教員の疑問を解消することを目的にいくつかのイベントを企画しています。また、科研費の適切な執行管理もリサーチ・オフィスが担っています。

Event Reports

2019年度学外研究費獲得記念・出版記念交流会

6月19日(水)に2019年度学外研究費獲得記念・出版記念交流会が行われ、横山研治副学長より本年度の学外研究費採択者、近年の書籍出版者の方々へ表彰状が授与されました。約30名の教職員の皆様にご参加頂き、出版された本や研究成果物を囲み、交流が行われました。このイベントが、先生方の研究成果の発信の場となり、新たな着想を得る機会となっていれば幸いです。来年度以降の開催もお楽しみに！



インクルーシブ・リーダーシップセンター（CIL）設立シンポジウム

2019年7月3日(水)、平成30年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業採択事業を受け、インクルーシブ・リーダーシップセンター（CIL）設立シンポジウムが開催され、学生、教職員およそ80名がシンポジウムに出席しました。シンポジウムではCILのセンター長であるALCANTARA Lailani Laynesa 国際経営学部教授によるセンター紹介が行われ、「インクルーシブ・リーダーシップの学術的研究、教授法、及び実践方法について探求・推進していく」というCILのミッションと「輝かしい、持続可能な未来に向けて果敢に挑戦をするインクルーシブ・リーダーのネットワークを構築する」というCILの目標が参加者に共有されました。



CILのHPは
こちらから↑